

「主の道をまっすぐに」

(マタイ3:1～12)

挽地茂男

2020.1.5 日本基督教団千歳丘教会

クリスマス、お正月といわゆる「祭」と呼ばれる時期が過ぎて、会社や学校が営業や授業を開始し、日常が始まります。「祭」とは元来、日常に対して非日常的な営みとして存在してきました。現代日本では多くの「祭」が非日常的な次元を失って、習俗や習慣として営まれています。

クリスマスもキリスト教という宗教に関係なく、ごくふつうの家でもイルミネーションで垣根や玄関を飾ったり、クリスマスツリーを飾ったりすることが多くなって参りました。クリスマスのプレゼントやパーティー、いろいろなクリスマス・ソング、クリスマス・ケーキやクリスマス・ディナー。クリスマス・シーズンに



なると、街角にはさまざまなお店のショーウィンドウや街路の飾り付けなど、お祭り気分、祝祭的な華やかだ雰囲気が増しに強くなってまいります。クリスマスはキリスト教の祭でありながら、キリスト教国でもない日本の国の冬の風物詩に、見事になってしまった感があります。

「祭」(まつり)を語源的に調べてまいりますと、①神を「待つ」(神の到来を待つ)、②神に「奉^{たてまつ}る」(神に献げ物をする)、③神に「服^{まつら}ふ」(神に仕える)等が上げられております。クリスマスとは、アドヴェントから、救いの神を新たな気持ちで「待ち望み」、神さまがイエス・キリストを世に遣わすことによって成し遂げてくださった救いに感謝をしつつ献げものを「奉り(献げ)」、その神様に喜びをもって「服ふ(仕える)」ということを確認する「とき」であります。

今申しましたように、祭の「とき」とは、一旦日常からの離れた、凡俗から離れた非凡非俗の常ならぬ「とき」です。日本語には〈秋〉という字を〈とき〉と読んで、この〈非日常〉的な時を表現することがあります。(イ)天地の稔^{みの}り・収穫の秋(とき)。この〈とき〉

に秋の字を当てます。また（口）国家の危機存亡の秋（とき）。この〈とき〉にも秋の字を当てます。そしてこの天地の稔り・収穫の〈とき〉、また国家の危機存亡の〈とき〉に神が絡んできます。人間（人知）を超えた超越的な力の介在を人は認めるのです。人間の力を超えた神の力が稔りをもたらし、国を護るのです。そこに祭が現れるのです。稔りの〈秋（とき）〉には収穫感謝祭が、国家の危機に際しては、護国祈願の儀式が行われたりするのです。この〈秋〉であらわされる〈とき〉は、日常の時と区別される常ならぬ重大な時が表わされているのです。

またこれと似た表現で、非日常と日常を区別する〈ハレ〉と〈ケ〉という言い方があります。〈ケ〉は漢字の猥褻わいせつの褻なの字——訓読みで「褻けがれる」とか「褻なれる」という字——に、もう一つの音読み〈ケ〉を当てます。〈ハレ〉はお天気が晴れるの「晴れ」を使います。これによって日常の〈ケ〉の時に対して、非日常的な〈ハレ〉の時を区別します。〈ハレ〉で今日ご結婚のご兩人に、友人を代表してご挨拶申し上げます。とか、

今日〈ハレ〉で本学に入学された新入生諸君には、というように日常的な〈とき〉と区別された〈とき〉に使われます。正月や、成人式などもそうです。日常の俗なる〈ケ〉の〈とき〉に対して、非日常の聖なる〈ハレ〉の〈とき〉には、普段着や作業着ではなく、〈晴着〉を着てその日を祝うのです。この非日常の〈ハレ〉の時は、社会集団の生活のリズムが一層高まるとき、人々が集団的に凝集する時であります。このような祭から神を切り離すと、それは一般的な、文化や習俗・習慣になっていきます。このような文化や習俗もまったく無意味なものとはいいい切れませんが、これが商業資本と結びついたりすると、本来の意味の喪失が加速されます。そして、神を「待ち」、神に「奉り」、神に「服ふ」という祭の精神も失われていくのです。



本日わたしたちに与えられた聖書の箇所は、伝統的な聖書日課〔3年ないし4年のサイクルでいつ、どの

聖書箇所を読むかが決められている」では、クリスマスの前、アドヴェントの時期に読まれる箇所なのです。この箇所をキリスト教の祭であるクリスマスを前方に見据えて読みますと、この箇所をクリスマスの時期に読むことにした伝統的な聖書日課の〈意図〉が見えてまいります。この箇所は、神を「待ち」、神に「奉り」、神に「服ふ」〈とき〉としてのクリスマスに備えることを求めているのです。

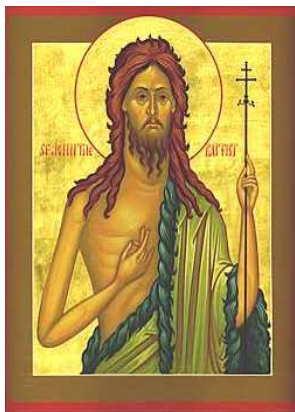
この箇所は、具体的には「悔い改め」を強調する洗礼者ヨハネの宣教活動を描いています。3章1－3節「その頃、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言った。3:3 これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」洗礼者ヨハネは、「悔い改め」で、イエス・キリストの到来に道備えをするように呼びかけます。ヨハネの宣教活動は、人々の間に魂の気づき

(霊的覚醒)を与えます。まるで「霊的な大覚醒運動」の様相を呈しています。4－6節。「3:4 ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。3:5 そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、3:6 罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。



この洗礼者ヨハネの備えた道がイエス・キリストの道につながっていることが、主イエスの宣教の第一声をみるとわかります。マタイによる福音書4章17節にその主イエスの第一声が記されています。その直前に主イエスが宣教の第一声を挙げた状況が12節で示されます。「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれ」、そして主イエスの第一声、17節。「そのときから、イエスは、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言って、宣べ伝え始められた。」主イエスはヨハネが捕らえられたときから、宣教を開始します。洗礼者ヨハネと主イエスは、どちら



「洗礼者ヨハネ」(イコン)

も同じメッセージを語ります。「悔い改めよ。天の国は近づいた。」洗礼者ヨハネから主イエスへとバトン——駅伝で言えば襷——が引き継がれました。どちらの目標地点も、人々を「悔い改め」に導くことです。「悔い改め」は救いのメッセージの中心にあるのです。

この「悔い改め」の要求は、「ファリサイ派やサドカイ派の人々」が洗礼を受けるためにヨハネの許にやってきたときに、激しく噴出します。3章7－10節。「3:7 ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「虻の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。3:8 悔い改めにふさわしい実を結べ。3:9 『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。3:10 斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」このヨハネの言葉を聞いて、ファ



リサイ派やサドカイ派の人々だけではなく、そばにいた民衆もびっくりしたことでしょう。せっかく洗礼を受けるためにやって来たのに、ヨハネは何を考えているのでしょうか。

福音書ではファリサイ派やサドカイ派の人々が、主イエスの敵対者・ライバル関係に置かれているために、わたしたちはまず彼らを「悪者扱い」しがちですが、当時の社会通念から言えば、彼らこそが当時の社会の倫理性を支え、社会の安定に貢献していた人たちなのです。その彼らをヨハネは「虻の子ら」と呼ぶのです。そしてまた洗礼を受けて、悔い改めを表明し、神の怒りを免れねばならないと言ったのは、ヨハネ自身なのに、ヨハネはファリサイ派やサドカイ派の人々が洗礼を受けにやってくると、歓迎するどころか、彼らに洗礼を授けることを拒んでいるのです。教会に誘っておきながら、行くと「何しに来た」と来会者に言っているようなものです。ヨハネは何を考えているのでし



グリュネヴァルト「洗礼者ヨハネ」

ようか。ファリサイ派やサドカイ派の人々の悔い改めが不十分だと言いたいのでしょうか。「悔い改めにふさわしい実を結べ」(8節)というヨハネの叱責は、彼らの悔い改めの不十分さを責めているのでしょうか。

一般にわたしたちは、「悔い改める」ということを、心の中にある思いを変えたり、考え方を変えたり、行動を変えたりすることと思っています。例えば、ギャンブルと酒で一家の生計まで台無しにしている父親が、「もう、ここでひとつ悔い改めて酒とギャンブルをやめよう」と考えて、悪い自分の生活習慣を捨てようとするもののよう考えるのです。そのように自分の生活についての考えを変えること、そういうことが悔い改めだと思っているのです。しかしヨハネの言う悔い改めは、どうも違っているようです。

ヨハネの言う「悔い改め」はもっと人間の深い認識に根ざしたもののなのです。それは9節。「3:9

『我々の父はアブラハムだ』など



と思ってもみるな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」という言葉の中にうかがうことが出来ます。「悔い改め」が表面的な宗教的な所作に過ぎず、真の「悔い改め」のない心の中には、悔い改めのかわりに、何かがあります。プライドや特権意識が存在します。ヨハネの言い方を借りて表現すれば、自分たちは「石ころ」よりは立派だという心(思い)があるのです。当時のユダヤ人たちは、自分たちが「アブラハムの子」(つまりアブラハムの子孫、イスラエル民族、ユダヤ人)であるということの民族的な特権的な意識を持っていました。この特権意識は、民衆の中にこんな民間伝承を生み出していました。「たとえ地獄に堕ちるような罪を犯したとしても、地獄の門の前にはアブラハムがいて、『アブラハムの子』だと見ると、救い出して天国に送ってくれる。」わたしたちは神にとって特別な存在、「アブラハムの子」なのでから。地獄の沙汰もアブラハム次第という訳です。〔「金持ちと乞食のラザロの物語」(ルカ16:19-31)の背後にもそ

のような民間伝承が想定できる。]

「『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな」(3:9)とヨハネは激しく批判し、「**言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができる**」と責め立てます。「**アブラハムの子**」という彼らの主張がどれほど無価値なものであり、「**アブラハムの子**」という自意識(自負心)がどれほど空疎なものであるか、彼らの薄っぺらな自尊心がどれほど自分を知らない自己認識の欠如の証しであるかを、ヨハネは突きつけます。それらは神の恵みによるものなのです。

しかし、ヨハネは「**アブラハムの子**」という彼らの主張がどれほど無価値なものであり、「**アブラハムの子**」という自意識(自負心)



がどれほど空疎なものであるかを言おうとしているだけでしょうか。いやむしろ、ヨハネの目は「**石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができる**」**神**に向いてい

るのです。石ころからでもアブラハムの子を作り出す神に目が向かうところから、真の悔い改めは始まるのです。自分自身の内側を吟味することから始まるのではなく、わたしたちを創り、わたしたちを生かしておられる大いなる神の存在に、自分自身の造り主に思いが至るところから、精神と行動を含めた真の自己変革は始まるのです。アブラハムとその子孫であるイスラエルの民族が優秀であったから、神は彼らに目をとめられたのではないのです。それは神の恵み(恩寵)以外の何ものでもないのです。大事なものは「石ころ」に目をとめられる神なのです。その神の前にある「石くれ」としての存在は、「恵み」以外に何ら誇るべきものがないのです。血筋や血族など救いには何の役にも立たないのです。見せかけの敬虔さで自分を飾る(装う)者たちに、つまり神を知らない宗教行為者religious performerに、ヨハネは神に直面せよと迫るのです。

しばらくすると、今、毎週の礼拝で読んでいますマタイ福音書は山上の説教(マタイ5章)に至ります。そこにはあの有名な言葉が出てきます。「**心の貧しい人々は、**

幸いである、天の国はその人たちのものである」(5:3)。幸い(祝福)を宣言されている人々は、逞しい



自我と強い自尊心を主張する人々ではありません。すべてを神により頼む人々こそ幸いだと語るのです。気仙語訳〔気仙

沼地方の方言にギリシア語から訳された聖書〕では「**頼りなぐ、望みなぐ、心細い人^{すあわ}ア幸せだ。神様の懐に抱^だがさんの^だ人達だ**」と訳しています。天の国(神の国)は、心貧しく、神様に信頼を置くしか希望のない人々の者だと宣言するのです。この考え方は、人間の王国や王権に関する考えを逆転しています。人間の王国は、たいてい、逞しい自我と強い自尊心を主張する人々のものだからです。

では「心の貧しさ」とはいったい何でしょうか。それは「あの人は心が貧しい」と人を評価する際の、心の豊かさの欠如や人格性を欠いているということではもちろんありません。精神的な渴望や謙虚さを含みますが、この表現はもっと深い次元をさしています。「心の」と訳されている言葉は、わたした

ちがふつう考える「心」ではありません。それは「霊」(プネウマ)という言葉なのです。それは聖霊の「霊」であり、神が人を造り、人に与えて人を生きる者としている「霊」なのです。それは人間存在の根源(根底、基盤)、人間存在の全体をさしている言葉です。ですから「貧しさ」の認識は、自分の内側を内向的に見つめることによって出てくるものではないのです。それは偉大な霊的存在、つまり神を知ること、仰ぎ見ることによってのみ与えられる認識なのです。山を仰ぎ、山を超えた方を仰ぎ見るときに与えられる感情なのです。それは自分の至らなさを責める、自虐的な表現ではないのです。偉大なる存在の前に立ったときに人間の口から漏れる正直な発話／言葉なのです。「わたしは貧しい。」しかしこの貧しさは、即、豊かさなのです。この貧しさは、即、幸いなのです。その貧しさは、さまざまなものを産み出す貧しさなのです。能産的な貧しさなのです。「**天の国はその人たちのもの**」だからです。

キリスト者ではないのですが——以前にもご紹介しました——

中桐雅夫〔『中桐雅夫詩集』思潮社、1964年〕という詩人が次のような詩を書いています。

「世相」

人は、明るい火がともっていると思っている。

だが、罪を焼く火ではない。

心を快く温めてくれる、ごまかしの火だ。

もし、人に心があればの話だが。
われわれ、われわれという声ばかりで、まるでいつも傍らに誰かがいてくれるようだ。

死ぬ時は、人は一人で死ぬ。

そんなことも分からぬらしい。

だから、小鳥の声などは聞かないのだ。

棺おけの中でもトランジスター
〔古い！今ならiPodやiPhoneか〕

のボリュームを上げたがる。

この信仰なき国の詩人たちが、
神なる言葉を誤用するのも、
何ら異とするにあたらぬ。

繰り返しますが、この詩人はキリスト者ではありません。しかしこの詩は、キリスト者ではない人の言葉は聞くに値しないと、突き返すことができるようなものではない



いでしょう。「人は、明るい火がともっていると思っている。／だが、罪を焼く火ではない。」わたしたちの宗教とか、信仰というのも、わたしたちの存在の根本に巣くっている罪など問題にしないで、快く暖めてくれる火のような

ものではないのか、と問いかけてきます。わたしたちが存在を芯から焼き尽くすような炎に身を晒すことなんかできないし、そんな気持ちすらないとしたら、いったい、そういうところで問題になる存在の根本とは何なののでしょうか。人は一人で死ぬ。神の前で裸で立つ。誰も側にいてくれはしない。神の目の前で、初めて晒し出されるような、自分の一番奥深いところにある心根、根性が問われる。この国の、神なる言葉を口にする詩人たちも、一度、神の前に素っ裸で立ってみたらどうか。彼らはそれができないで誤魔化しているだけだ。「この国」というのは、日本

のことです。詩人はこの国の詩人に向かって、一所懸命、人生の真実を歌っているようだけれども、そういう経験を持たない詩、つまり、本当の神様の前に立つことを知らないで、神を歌ってみたって、神に迷える人を気取ってみたって、そんな気取りが何になるか。そんな宗教芝居にどれほどの意味があるのか。そう問うのです。

太宰治の短編小説に「トカトントン」〔これも説教の中でよく引用いたします〕という作品があります。〔太宰文学の鍵になる作品



だと思っています。〕ある作家のところにある青年から手紙が送られて来ます。彼は、太平洋戦争の終戦の日。死のうと思

ったが、どこからか響いてきた、「トカトントン」という音を耳にすると急に冷めた気持ちになってしまった、というのです。戦後、小説を書いて発表しようとする、と、また、あの「トカトントン」が響いてきて、やる気が失せてしまう。それからというものの、何かをやろうとすると、すぐに、「ト

カトントン」が聞こえてくる。職場の仕事に打ち込んでみたり、熱烈な恋愛をしてみたり、政治運動に取り組もうとしたり、スポーツをやってみたり……

だが、どれも途中で「トカトントン」が聞こえてきて、やる気を無くしてしまう。どうしたらよいのだろうか、と尋ねます。それに対して、作家はある聖書の言葉をひとこと、彼に送ります。マタイの10章28節です。「**身を殺して靈魂（たましい）をころし得ぬ者どもを懼（おそ）るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。**」

悔い改めというのは、わたしたちの存在、思いも行為も何もかもひっくるめて、全存在といったらよいかも知れないし、あるいはその存在の一番深いところ、根本の所と言ってもよいと思うのですけれども、そのところで向きが変わるということです。わたしたち自身の全存在の方向が変わってしまうのです。

キリストの十字架は、神の愛の現われであると同時に、神の正義の現われでもあるのです。神の正義は、けっして罪に甘くはありま

せん。きわめて厳しいのです。その厳しさのゆえに、人間を愛しつつ、ご自身の正義を貫徹するために、神はご自身の御子を十字架にかけて処断したのです。パウロはこう言っています。

「神は…罪を取り除くために御子（イエス・キリスト）を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。」（ローマの信徒への手紙 8:2-3〔新共同訳〕）イエス・キリストは、この世の罪を取り除くために生まれたのです。クリスマスとは、御子イエス・キリストが生まれたことをお祝いする祭です。そしてこの御子を待つ、待望するのがアドヴェントなのです。この方を待つ者にとって一番大切なのは、その来臨の目的に沿って待つことです。

アドヴェントに、キリスト教の伝統的な聖書日課がこの箇所を選んでいる意味は大きいと思います。真の悔い改めなくして、真の祭はないからです。神に思いを向けて神を「待つ」こと、神に「奉る」こと、そして神に「服ふ」こと、それが「まつり(祭)」の本質です。時期的にはクリスマスは過

ぎてしまいましたが、その精神は、祭の後にも生きていなければなりません。主イエスに託された神さまの思いに心を致しつつ、新しい一週の歩みに向かってまいりましょう。祈りましょう。

2020.1.5 日本基督教団千歳丘教会



3:1 そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、

3:2 「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。

3:3 これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。』」

3:4 ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。

3:5 そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、

3:6 罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

3:7 ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。

3:8 悔い改めにふさわしい実を結べ。

3:9 『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言って

おくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。

3:10 斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。

3:11 わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。

3:12 そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」